

Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Vol.3

Part1 Social Contexts, Language Policy, and Language Learners

Chapter1 The Sociology of Language Teaching and Learning (pp.3-14)

John Edwards

発表の構成

- (1) 著者情報
- (2) 論文の構成
- (3) 論文の要約
- (4) 考察したいこと
- (5) 参考文献

(1) 著者情報

John Edwards

聖フランシスコ・ザビエル大学 (St. Francis Xavier University)

心理学・言語の社会心理学

【おねがい】 このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻
日本語教育 コースの授業「日本語教育方法論演習」(授業担当者:
南浦涼 介)での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017.

Handbook of Research in Second Language Teaching and
Learning. の発表のレジュメです。 教育的価値、資料的価値とし
てウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではあ
りませんので、論文等への引用 や掲載は固くお断りいたします。
また、分析対象の著作権は著 作者、資料文書の著作権は発表者に記
しますので、無断転載は ご遠慮ください。 質問については、東京学
芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>)ま までお願いいた
します。

(2) 論文の構成

1	Introduction	序論	言語教育・学習とは
2	Attitudes, Motivation, Necessity	姿勢、動機づけ、必要性	言語学習における感情との関係性
3	Classroom Dynamics	教室のダイナミズム	教師の視点から教室の多様性を捉える
4	Conclusion	結論	結論と今後の展開

(3) 論文の要約**1 序論 (Introduction)**

このハンドブックは、第二言語の教育や学習について考えるものである。

本章では、そうした教育や学習活動がなされている**社会的な背景**に焦点をあてる。

→しかし、ここでは第二 (second) という言葉はあえて使わない。広く言語に焦点がある。

「教室」という場合は、ここで教育や学習の社会背景を考えるうえで重要なポイントである。

△より広い時間・地理的な問題を扱うならば、学校外のことに言及する価値がある。

→家庭、職場、路上などの言語力学を学ぶ > 教室などより狭い環境への応用

→2、3 世代前、教室を即自的な必要や欲望のために人々が交流する informal な場と想定

⇒このことにより、LL教室や校外旅行、イマージョンクラス、広く流布し専門用語を学ぶなど多くの幅広いアプローチが発生した。

※いまだに教室の子どもたちは、現実の社会生活の言語に触れていない。教科の問題

教室内の言語の多様性について→**純粋な形ではなく、互いに絡み合いながら存在**

- ・「外国」語を話す子どものいる教室
- ・地域で支配的な非標準形の言語を話す子どものいる教室
- ・就学前に地域の非標準形を使ったり学んだりした「外国」語話者のいる教室（バイリンガル）
- ・地域の「英語」（'local' Englishes）（イマージョン）

→言語の「絶対主義」の取り替えを余儀なくされる。

2、姿勢、動機づけ、必要性

教室での教育は、学校外の力によって補強されている。

→社会的に必要性が明確な場（例：移民とその子どもたち）。学校外との繋がり。

→必要性のない場においては、学校の仕事は難しくなる。分離された状況。

（ネバダとネイメーヘンの例、動機付けと姿勢の問題）

言語への姿勢に関するいくつかの論考

- ・ギャレット（2010） 非常に優れたおおまかな問題の論じ方の提示
- ・ドルニュイとウシオダ（2009） 言語学習の問題に特化

→これらの論点はいずれも、**好意的な姿勢は言語獲得の容易さや深さに寄与すること。**

好意的な姿勢は、教室内で維持され、創造されうること。

動機付けの形や、それが一番促進される方法、また個人的・社会的要因との関わりについて多くの考察が与えられたが、その中心性の受容は学者の中で標準的なものとなった。

→ガスとセリンカー（2008） 動機付けは素質の次に成功の前兆として現れると指摘。

⇕

マクナマラ（1973） 姿勢は言語学習において少しも重要なものではない

- ・必要性が姿勢にまさっているかもしれない
 - アイルランド語の調査報告、能力の獲得から姿勢へということの暗示
- ・言語学習をより大きな背景の中で扱わなければならない。
 - 19世紀のアイルランド人の言語推移、英語の借用の問題
 - アイルランド人 英語を嫌う一方で、その実用性を理解
 - ガードナーとランバート（1972） ○統合的動機づけ（×道具的動機づけ）

☆筆者によると…

好意的な姿勢と、好意的ではないがポジティブな姿勢との有用な区別の可能性

→言語学習は非現実的で人為的な仕事。コミュニケーションは教科知識の付随。

※言語教室における欠点は、言語の現実的な使用の欠落であることは明白

△一方で、だからと言って姿勢が重要でないとは言えない。

姿勢、動機づけ、必要性の相互作用の最小限の感覚でさえも持っている、「ビッグランゲージ」の文脈において外国語の教育や学習に関連する主な問題を理解することが簡単になる。

相対的な簡単さや難しさは、どちらも権力や支配について扱う文脈背景と重大なかかわりを持つ。

→これは、なぜ多くの英語話者が単一言語者であるのかを説明する。

そして、それはまた、大部分の第二言語学習者がなぜ英語を学ぶのかをも説明する。

では、ヒスパニックの数が黒人のアメリカ人の数に迫いついた、スペイン語はどうか。

→中国語、英語の次に大きな言語話者のグループを持つ。

→アメリカの理想的な第二言語。 現代語教育の要として存在。

エドワーズ (2001)、高等教育レベルの語学学習者の半数以上がスペイン語話者

「間違いの」方言と「適切な」標準的な言語を取り替える

ことは正しいとされ、学校では早期の言語シフトはより良いと考えられていた。

→言語は一種のアイデンティティの指標、あるグループへの所属、連帯意識

→Lippi-Green(1997)、Trudgill(1975)によれば、こうした視点の欠落を明らかにするためには、「正しい」、「間違った」言語とは何かと人々に尋ねればよい。

言語学習における言語の扱い方と教育、学習について

→教師を悪役にしたいわけではない。

→一方で教師も社会の一員であり、子どもに対する影響力は莫大である。

「不利益 (disadvantage)」という語は、グループの差異の反映や、社会的な不連続の生産物として、適切な使用がなされるならば、正確で有用な用語である。

→社会的や教育的な不利益が、遺伝的な基盤に基づくものという見方は間違い(エドワーズ 1989、2010)

→不利益=不利な立場であるという可能性を排除するものではない。

→別の要因としては環境要因が挙げられる。「文化的剥奪」

→文化や階級の違いを受け入れても、それを不利益とみなすことを否定する別の立場もある。

→結局、不利益に関する論争が言語学という限定された文脈においてなされていた。

Walsh(1991)は、プエルトリコの教師について次のように述べる。

彼らは言語を知らないため、考えることもままならない。言語を教えるのは我々の仕事である。しかし、両親もまた言語を知らない。なぜスペイン語に時間をとるのか。焦点を当てられるべきは「良い英語」である。

これ以上にずばり、不利益な立場について述べているものがあるだろうか？

談話分析の重要性は、より経験的な調査を軽視する方向にあった。

しかし、談話や会話の詳細を注意深くみると、多くの興味深いことが明らかに出来る。

談話の研究が常に教育活動や改正につながるということはまずない。

⇒言語の信念と姿勢に対する注意深い研究が継続することを願っている。

3、教室のダイナミクス

教室で発見された、興味深く多様な言語の混在や言語の種類について言及 (Steiner&Ladjali, 2003)

→教室は、多様な言語が存在、共存する唯一の環境。多様性の活用の必要性。

△しかし、現状を見ると多様性は好意的に受け入れられてこなかった。

このセクションでは、「教師」に焦点をあてる (働いている社会的な環境の解釈、役割)。

→本質的には認知的な領域 △全体的な、文脈を考慮した観察

言語教育を脇に置いて、言語の混交する場としての教室を単純に考えると、次のような論点がある。

- ・外国語や非標準的な方言を受け入れるか否か
- ・教室の多様性を許容するか、単一言語規則を維持しようとするか
- ・学校を社会変革の貢献するものとするか、「主流」の現状を支えるものとみるか
- ・「移行型」バイリンガル教育 対「維持型」バイリンガル教育のメリットについて言及
- ・イマージョンプログラムを促進するか、サブマージョンのように無視を容認するか
- ・多文化主義を採用するか、それにしりごみするか

以上のような問題の中では、**教師の知識や感受性、姿勢**が重要となる。

何十年にもわたって、教室の文化や言語のバリエーションに対する配慮が典型的に教師に不十分であるということに失望し驚いてきた。 △教師の言語的な知覚を広げることは難しいことではない。

Ex) Black English：偏見のない心で聞けば、発音などは他の英語の変種と変わらない

以下、多くの研究に触れながら問題点などを指摘していく。

- ・生徒の言語の多様性に対して偏見を持たない教師は、子どもの言語的な興味や能力を育成するのに最も成功する。(Andersson&Trudgill, 1990)
→これを広めていくべき。そのような教師は子どもの全ての素質の育成に成功するだろう。
△このような心の広さ (open-mindedness) の発達を促進するいい方法は何か？
→アプローチは言語的・文化的問題に関する最新の証拠の適切な提示に基づくべき (Beyknot (2002), Gaine(2005), Pearce(2005))
- ・現代の言語的・文化的な見識は教師に利用されるべきである。
→社会言語学の履修を要求したアナーバーの Black English trial の判決は、その後の教師育成のプログラムに有効な影響与えたが、John はその判決が将来の処置にとって必ずしも一番よい前例ではないと考えている (Labov, 1982、Lanehart, 2001)
それよりも、基本的な言語の問題に注意深く定期的に注目をすることは、教師の感受性がより成長し栄える土壌となると信じている。
- ・学校における職業の社会化は、刷新的な教師の育成の試みを妨げるものとして知られる。
(Brouwer&Korthagen, 2005)
→教師は周囲の認識や感情に影響を受けやすい…あいまいさや無知が原因

生徒の能力に関する正確な言語的情報をもった新しい教師を育成することは、こうした誤解や無知による連鎖を断ち切ることになるかもしれない

- ・非標準型（「外国」）の言語を話すコミュニティから来たより多くの教師の募集を必要とする

→マイノリティのグループから来た教師は教室における言語・文化的な感受性をあらわす。

Ex)少数派のグループから来た教師は、教室において言語・文化的な敏感さを明示するだろうと主張
(Quirocho&Rios, 2006)

△そのグループ内でも非典型的であるかもしれないことを指摘することは重要だ。

★教師育成の過程では、中産階級化に拍車をかける傾向があるかもしれない。

⇒特定の民俗言語や社会階級のコミュニティからの教師の増加は、望ましい教室の増加をもたらす。

↓

一般的な認識は教室に非標準形の英語に対する小さな空間をつくる (Edwards&McKinnon, 1987)

Ex) ノバスコシアにおけるアカディアンの子どもや、アフリカ系カナダ人

⇒英語でもケルト語でも本流からの逸脱としてそのグループがみなされる不本意さは当然重要だ。

- ・ステレオタイプの先入観の危険性は明らか。

①1920 年代（アメリカのスペイン語話者が精神遅滞とみなされていた時代）のデータに基づいて、バイリンガル教育を否定する立場がある。(Flores, 2005)

②フランスは単一言語主義の教育システムのため、異なる言語や文化背景をもつ子どもは困難としてしかみなされない。(Herot&Young, 2005)

③アメリカの教師準備プログラムの欠点…教室の言語や文化の多様性についての情報不足 (Zientec, 2007)

④教師が子どもに抱く様々な期待が証明された (Tenenbaum&Ruck, 2007)

- ・バイリンガル教育やその他の言語教師の育成は十分ではない。

→いくつかの代表的なコメントによって、大学の教師育成コースがどれほど妥当性が少ないかということが明らかになっている。(Grinberg&Saavedra, 2000)

- ・非標準形の方言の本質的な重要性への理解は増加している。が、それは学問という小さな領域にとどまっている。

→数十年間の社会言語学的な洞察にもかかわらず、それが教育者や管理者に浸透していない。(Siegel, 2007)

- ・「American Dialect Society」(1943, 1964, 1984, 2003) は方言研究の興味深い縦断的報告である。

△こうした研究が進む中で、研究者や教師を教える人は教室における方言の変化に関する情報の重要性について理解しているが、適切なテキストの不足によって邪魔されている。

(Wolfram&Christian, 1989)

△Labov (1969) の「logic of nonstandard English」以来、教師向けの教材はほとんど開発されていない。

4. 結論

本章は、**姿勢とモチベーション**、そして**それらが認知された必要性と影響し合う方法**について力説してきた。これはどの教室にも適用可能。→教育の環境は認知やそれらの取るに足らない結果なのか？

△学校における言語や方言は、三角法や植物学、文学と同じようなものとして理解され得ない。
なぜ？→コミュニケーション手段という以上に、彼らの**個性や社会的なアイデンティティの要素**
教師が非標準形の言語を話す子供の言語レパートリーを拡張→家庭における困難を引き起こす可能性
⇒子供を二方言使用者にする手助けをすることは、非常に扱いにくい仕事である。

方言から言語へ拡大して考えてみると、言語的な能力や柔軟性は**他の全ての教育の要素を支えるもの**。

⇒他の何よりも**基本的**なものである。

言語は、社会や個人の扉を開くためのきわめて重要な鍵である。

教師は、言語教育に焦点を当てていないものであっても、言語の問題を必ず深く抱えこんでいる。

言語教育や学習の社会学は、言語が存在し、文脈を創り出し、関係者の認識によって制限される環境について扱うことが、何よりもまずもっとも重要である。

それがより分かりやすいのは「人工的な」「自意識の強い」環境→「自然な」環境にも見られる。

→現実の切迫した必要性の行動に関する影響は、**認知**によって支えられている。

(4) 考察したいこと

本の最初に掲載されている論文ということもあり、この本の問題意識が強く押し出されたものと考えられよう。本授業の最初で指摘があったように、言語学の視点や教授法という視点からは多くの考察が加えられてきた日本語教育学であるが、いまだ社会との関係を扱うものは少ない。この論文はその題からも分かるように「言語教育と学習の社会学」を扱っており、社会と言語の関係について述べており、そのような視点を考える上でいくつかの重要な指摘もあった。

著者が心理学者ということもあり、認知心理学の知見にたった意見が多く、今まで読んできた論文にはなかった新たな視点を得ることが出来たが、ここでいくつか論点をあげてみたい。

- ①日本語教育において学習の姿勢やモチベーションについてどう考えるか。または、どう促進するか。
- ②学習者や教育者の言語的背景について、日本語教育においてはどうか考えられるのか。

(5) 参考文献

- ・守谷智美「第二言語教育における動機づけの研究動向：第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」『言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線』2002年5月
- ・日本語教師のページ (www.nihongokyoshi.co.jp) 7月27日閲覧